

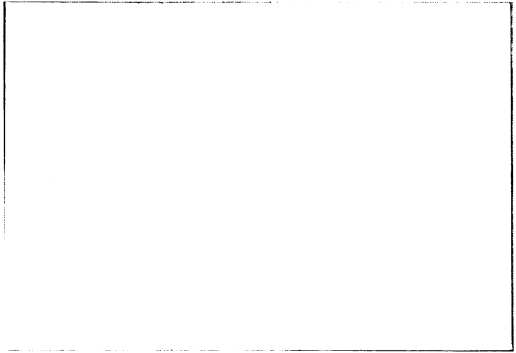
# 東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会 一九九五年度合同研究部会に参加して

上 野 輝 将

第四回目を迎えた東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会合同研究部会は、十月十七日から十九日の三日間、名古屋において開催された。筆者はその内、十七、十八の二日間参加させて頂いたので、若干の感想を述べておきたい。

初日は、名古屋大学シンポジオンにおいて、加藤延夫名古屋大学総長の挨拶の後、基調講演Ⅰに移った。名古屋大学大学院国際開発研究科教授・附属図書館長の潮木守一氏による「日本の大学へのドイツ・モデルの移植」という講演であった。日本の大学がドイツ・モデルだという私たちの常識がいかにも誤っているかを教えられた。その例証としてドイツの大学に学ぼうとした明治三十年代の京都帝国大学の失敗のケースが具体的に明らかにされたが、ある意味では近代日本の大学の歴史にも形成期には多様な可能性が秘められていたように筆者には思えた。「知識詰め込み型」（東大型）ではダメだといって大学改革が喧伝されている今日、現代的な示唆に富んだ報告であった。

次に夕方から愛知会館に移動して、国立国会図書館の等 雄一郎氏から「占領関係文書の利用について」という基調講演Ⅱがなされた。現在、国立国会図書館において、アメリカの日本占領に関わる諸文書・諸史料、いわゆる占領



等 雄一郎氏(左)と上野室長

軍文書の龐大な収集・集積が進んでおり、今や日本近現代史研究に不可欠の材料となつている。等氏は、国会図書館の憲政資料室などに所蔵されている主な占領関係文書やその他市販されている文書等の概要を説明し、その内、ほぼ全てがマイクロフィルム化されたGHQ/SCAP文書の利用法、及び占領関係文書中の大学史関連の資料の利用法について、各種タイプの文書見本コピーを回覧して懇切丁寧な解説をされた。私たちにとつて、参考になつたのは見本の一つにあつたICU(国際基督教大学)関係の文書であり、占領関係文書が戦後初期の大学創立過程を辿るうえでこれまで未知の貴重な史料として、あらためてその意義を強く実感した。神戸女学院に關係する文書が存在する可能性も充分あり、本学の戦後復興過程の歴史を研究するうえで極めて重要な史料となるはずであり、国会図書館への早急な調査の必要性を

感じた。

六時から同会館に於いて、研修懇親会がもたれ、各大学からの挨拶の中で、筆者も神戸女学院の震災被害状況と大  
学史関係者からの物心両面のお見舞いに対するお礼の言葉を簡単に述べさせて頂いた。参加者との歓談の中で、等氏  
とも面識を得て、調査の際のご協力をお願いし、ICU関係の見本コピーを頂戴できたのは幸いであつた。

二日目は名古屋大学シンポジオンにおいて、基調講演Ⅲとパネル・ディスカッションが行われた。名古屋大学名誉  
教授鈴木英一氏による講演「日本占領と大学改革―占領政策の動向を中心に―」は、詳細なレジュメに基づきわかり  
やすく説明がなされた。戦後教育改革、新制大学の発足など高等教育改革に占領軍の教育政策が絶大な影響力を持つ

たことはいうまでもなく、その全容を把握することは戦後の大学史研究に不可欠の作業である。鈴木氏の講演は、その基本的な見取り図を提示して頂く意味合いで大変貴重であった。

午後の「大学史の現状と課題」と題するパネル・ディスカッションに移る。まず高木雅史氏の報告「名古屋大学における五十年史編纂と資料室設置への取り組み」で、興味深かったのは、各通史担当者による稿本の作成で、これは通史担当者の著作権の保証と、第二次原稿作成者と通史担当者とのやり取りを省略するためとのことであった。第二次原稿作成に対する責任の曖昧さという反省点も含めて、本学の将来の新たな年史作成の際にも参考とすべきであろう。次に西口 忠氏の報告「『桃山学院百年史』編纂とその後の取り組み」では、示唆を受けたのは、年史編纂と職員研修や広報、講義(総合講座「泉州の今昔」での学院史の講義)などとの関係であり、また大学新キャンパスに設置される近く最初の展示を開始するという学院史展示室には若干の羨望を感じた。最後に、桑尾光太郎氏の報告「学習院大学史料館の業務と大学五十年史編纂事業」は、A歴史資料部門、B博物館・生涯学習部門、C研究・出版活動、D公開・レファレンス部門、E大学五十年史という史料館の充実した活動ぶりが、絵葉書きに見る瀟洒なその建物のたたずまいと相俟って印象的であった。

以上、二日間にわたって参加した合同研究会の感想を述べさせて頂いた。筆者にとつては、昨年度に続き二度目の参加であったが、今年度も昨年に劣らず充実した研究発表の数々であり、本学史料室の参加者全員にとつても大変りの多い合同研究会であったと思う。今回の担当校、及び東西の幹事校の関係者の方々に厚く感謝する次第である。十八日の西日本大学史担当者会の臨時総会では、懸案の東西大学史担当者会の合同実現に踏み切ることが了承された。こうした大学史研究運動の進展に刺激を受けながら、私たち神戸女学院の史料室も一層頑張っていかなければと、思いを新たに帰路についたのであった。

(史料室長)